

年間第25主日

マタイ 20・1-16

2020.9.20

高円寺教会 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 うめざき たかいち 梅崎 隆一神父

わたしが神学生の頃、養成担当をしてくださった神父様は「自分はペンキを塗っているときに、『ああ、これは自分の世界だ』とを感じる」と言っていました。福岡教区のアベイヤ司教も「もし今の仕事以外の他の仕事を選ぶとすれば、窓拭きの仕事をしたい」と言っていました。彼らにとって、ペンキを塗ること、窓を拭くことは、気を使って心をすり減らすことなく、今日も明日も次の日も続けられる、そんな思いを持っていることが分かります。

そんな話を聴いていたわたし、神学校が休みになるといろんな所にアルバイトに行きましたが、「これが自分の世界だ」と思った仕事一つもありませんでした。コンクリートを機械はつを使って研っている時に、これが自分の世界であると思ったこともないし、ペンキを塗っているときも、これがまた明日も続くのかと重たい気持ちになります。居酒屋でバイトして、ホールで注文を取ったり、酒の肴を運んでいるときも、周りに気を使いすぎて仕事が終わるとやれやれという感じです。仕事中に酔っ払いに絡まれたりすると、「あのお客さん早く帰ってくれへんかな…」とか、そんな調子で仕事をしていました。司祭になるには召し出しが絶対条件ですが、適応できる世界の無かったことが司祭になった要素の一つなのかもしれません。

わたしの弟は、朝の5時から夜の7時までネギ畑で働いて、疲れて帰ってくるのですが、幸せそうです。蚊やブヨに刺されるから夏でも長袖で仕事をしていてなかなか過酷なのですが、笑顔で「やることいっぱいある」と言い、非常に前向きに仕事に喜びを感じていることがありありと感じられます。

仕事は色々あるけれど、適正というのがあり、適正とはAIのビックデータ解析などによる客観的なデータによって示されるものではなく、個々人が自分の心の思いに従って自主的に判断することのようです。

仕事の適正については個人差があります。しかし仕事とは違い、すべての人が、人である以上、取り組まなければならない仕事があります。それは、「人はなぜ

生きているのか」、「人が善く生きるとは一体どういうことなのか」、「人の尊厳を大切にすることはどういうことなのか」、「ヒトという生物に生まれたけれども、単なる生物ではなく、人間らしく生き、人間の完成に向かっていくってどういうことか」、「神と隣人を愛する」、こういったことは全ての人が神から求められ、人の心の奥で人が求めている、偉大な仕事です。お金をもらうための仕事ではなく、人格を持つ人間である全ての人に求められる仕事です。「わたしはお料理作ることが仕事だから、そんなことは、神父さん、あなたがやってください」というわけにはいきません。

神の国にたとえられるぶどう園で働くことは、神が望まれる実りを刈り取る仕事です。そしてその実りは良い木である人間一人ひとりが実らせるものでもあります。人間である以上、人間らしく生き続けること、これは大きな仕事です。

ですから、何もしないで広場に立っている人や誰も雇ってくれない人は、働きたくても働けない人を意味しています。神の国に生きること、人間として喜びをもって生きるとは何か、それがどんなことなのかが見えなくなって迷っている人のイメージです。「自分は、誰にも雇ってもらえないから、生きていることが罪じゃないか」、「自分の存在っていうのはつまらないから誰も雇ってくれないのではないかと深刻に悩んでいる人がいる。人生の中で生きることの意味が見えなくなった人のところに主がやってきて、人間しかなしえない重要な仕事を思い起こさせてくださいます。人生の中で自分の存在なんて誰も大切にしてくれないと思うときがあったとしても、必ず主が人生の中に登場し、大切な仕事へと呼び掛けてくださいます。

永遠の命を得ることと、神の国に入ることは、同じことを意味します。人間が人間らしく生きることが永遠の命という実りとなることを実感しながら働けることはとても幸せなことです。神の国のために働くなら、働くこと自体が報酬をいただいているのと同じことなので、長く働けることはとてもありがたいことです。しかし短く働いた人と、長く働いた人が同じ報酬であることに不満を持つ人もいます。「長く信仰に生きてきたわたしは素晴らしい仕事をしているのだから、一年前に洗礼を受けた人と同じであるはずはない」とか、「わたしの尊い仕事において日本の国に貢献してきたことが一労働者のそれと同じわけがない」などと考える人からはそういった不平が出てくることでしょう。そして、そういった考え方にとらわれているなら、たくさんの財産を手放せずにイエスに従えなかった金持ちの青年（マタイ 19・21-22）と変わらない者となります。永遠

の命を報酬として考えるなら、社会で作られた^{はかり}秤ではなく、神様の考え方で社会を眺めなければなりません。

神の国においては全ての人大切にされますから、「誰も雇ってくれないので」と、自他ともに社会の役立たずだと判断している人に、「そんなことはありえない、全ての間人は神に似せて造られたのだから、どの人も永遠の命を実らせ、それを刈り取る仕事に呼ばれている」、と告げ知らせることを福音宣教と言い、新しい実りをもたらす種を蒔き、豊かな実りを刈り取ります。

この世界は神様が作られたぶどう畑であり、神様が望む実りを豊かに結ぶのが人間の使命です。しかし神が作ったぶどう畑から神を追い出そうとする人間の姿があります。それは社会の中の最も小さい者の一人に何をしているかで量ることができます。

学校に適応できずに不登校になったり、不器用であるために社会に適応できなかったり、会社が必要としている仕事ができないと自信を無くしてしまったり、人間らしい仕事をしたいのに、日々の糧のために人間らしさを否定され、人生の大半を費やした会社から会社の都合で解雇される現実の中で、「自分なんて、いてもいなくてもどうでもよくて、どうせ自分の代わりになる人などいくらでもいるし、つまらない人間だ。誰からも必要とされない存在だ」と思い込まされてしまっている現実には、神からぶどう畑を奪い取ろうとしている結果であると言えます。

世界という神様がわたしたちに与えてくださったぶどう畑で、わたしたちは主の望まれる実りを実らせ、刈り取り、味わいます。神に似せて造られた全ての人間の尊厳を守ることが主の望みです。人間性を損なわせ、弱らせ、苦しませるものを取り払い、豊かな実りを刈り取るために働くことができますように。